
+° *。君の足音。*° +

竹原ゆい子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

+。*。君の足音。*。+

【Nコード】

N3763B

【作者名】

竹原ゆい子

【あらすじ】

毎朝、自分の家の前を通る”君”に片思いしている”俺”。2人のピュアで心温まるラブストーリーです。

第1話

第1話

朝目覚めると、いつでも君の足音が窓の外から聞こえていた。僕は、君の足音が聞こえたらどんなに早くても起きてしまう。

それは、君の後ろ姿を一目でもみたくてたまらないからなんだ。

赤いリボンのセーラー服を着ている君に、僕は淡い恋心まで感じている。

おかしいかな――

君がまだ処女なのかなとか、君の周りにはどんな男がいるんだろうとか、考えることだつてなくはない。でも、好きな女の子のことが気になるのは普通のことだと思う。

馬鹿にされたつていい。

俺は――

君に恋してる。

第2話

第2話

その日は水曜日だった。

俺はサッカー部の朝練に出るために、家を早くでた。

君に出会ってからの朝練はじめてだった。

俺が少し期待をしながら後ろを振り返ると

そこには期待通りに君が歩いていていた。

君はきょとんとして俺をみている。

可愛い――

俺は前を向いて歩き出した。

後ろから君の足音が聞こえる。

俺は真っ赤な顔を隠すように、下を向いて駅へと向かった。

このまま時が止まればいいのに　と、
本気で思った。

俺は駅について、階段を上り、ちょうど到着した電車に乗り込んだ。

ブルブルブル――

発車の合図が鳴ったとき、駆け込み乗車で君が俺の前に乗ってきた。

満員電車なので、俺と君の体はぴったりとくっついている。

駆け込み乗車で走った君は息を取り乱していた。

その生暖かい息が俺にかかる。

俺は我慢の限界だった。

君にふれたい……………

もっと近づいていたい…

変態みたいなことを考えた。

俺は君から意識をはなすために、携帯を取り出しじり始める。

その時、突然に急カーブが来た。

俺は君のほうに倒れ込んだ。

携帯をいじっていた左手が君の首筋に触れた。

「すみません。」

俺は素直に謝り、手を元の位置に戻した。

君は顔が真っ赤だった。俺は限界を越えてしまった。

しかし、痴漢はしたくない。

どうにもできず、次の駅で下りた。

しかし、君は下りなかった。

電車は発車する。

俺は窓越しの君と目があつた気がした。

最終話

最終話

昨日のことで、俺はもう十分だと思った。

知らない女子高生と両思いになるなんてあるわけない。

昨日、告白してきた2組の女の子と付き合ってしまったおつ。

名前なんだっけ。

バレー部のギャルな子だったと思うんだけど。

すべては君を思い出にするため――

今日からはきちんと目覚ましをかけておきる。
君の足音でおきることはもうない。

すこし悲しかった。

支度を済ませ、新たな気持ちで家をでた。
道はしーんとしている。

幸せな……

夢をみたのかな——

俺はまだ暗い未来へ向かって歩き出した。

後ろからパタパタと君の足音が聞こえる。

俺は後ろを向いた。

君は前と同じように顔を赤らめている。

俺は驚きつつも、そっと君に手を差し伸べた。

きみは細くて冷たい指を俺の指に重ねる。俺はその手をぎゅっと握りしめた。

2人は見つめ合ったあと自然に唇を重ねた。

彼女の唇は柔らかくて、暖かった。俺の心臓は爆裂するほどにドキドキしている。

「……………はじめまして。君の名前は？」

君はにっこりして、

「中原美嘉です。あなたは???」

と答えた。

俺は君の笑顔に引きつけられながらも答えた。

未来は昇った太陽で輝きだす。

俺は、君を愛することを太陽に誓った。

《完》

最終話（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。こんな終わり方、ありがちですみません……ここでの初小説なので、両思いにしました！
！楽しんで頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3763b/>

+ ° *。君の足音。* ° +

2010年12月16日15時41分発行